

教育研究業績書

令和 3 年 3 月 31 日

氏名 田中 洋一 印

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の 別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又 は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. e ポートフォリオを利用した知識創造サイクル	共著	平成 29 年 2 月	教育工学選書Ⅱ『教育分野における e ポートフォリオ』	e ポートフォリオ・リテラシースキルに基づき授業を設計した上で、SECI モデルに基づき暗黙知と形式知のサイクルを設計することにより、学習コミュニティが活性化され、知識創造サイクルが促進する事例を報告。 第 6 章「e ポートフォリオと学習コミュニティ」共著者：山川修， <u>田中洋一</u> 本人担当：6.4 (pp. 141-156)
(学術論文) 1. オンライン授業のための FD 活動のリデザイン	共著	令和 3 年 3 月	仁愛女子短期大学研究紀要第 53 号 (掲載予定)	COVID-19 対策としてフル・オンライン化した授業のために、FD 研修会、公開授業、授業評価アンケート等、リデザインした FD 活動を報告。 共著者： <u>田中洋一</u> ，内田雄，増田翼 本人担当：FD 活動の統括
2. リアルタイム配信 (同期型) オンライン授業の設計と実践	単著	令和 3 年 3 月	2018 年度採択 文部科学省 私立大学研究 ブランディング事業 2020 年度成果報告書 pp. 104-107	2020 年後期に担当した幼稚園免許必修科目「教育の方法と技術」において、どのようにリアルタイム配信 (同期型) オンライン授業を設計し実践したのかを報告。
3. 2 年制保育者養成校のディプロマ・ポリシー (学習成果) についての検討-本学幼児教育学科のディプロマ・ポリシー (学習成果) を中心に-	共著	令和 3 年 3 月	2018 年度採択 文部科学省 私立大学研究 ブランディング事業 2020 年度成果報告書 pp. 6-14	全国養成校における DP の現状調査、本学 DP の Semester 毎の分布を分析した結果を報告。 共著者：松川恵子，香月拓， <u>田中洋一</u> ，内田雄 本人担当：データの前処理方法，グラフ化等
4. 2 年制保育者養成校のアドミッション・ポリシーについての検討-高校の学びから養成校の学びへ-	共著	令和 3 年 3 月	2018 年度採択 文部科学省 私立大学研究 ブランディング事業 2020 年度成果報告書 pp. 22-30	全国養成校における AP の現状調査、本学学生を対象とした高校と短大との学びの接続における意識調査の結果を報告。 共著者：香月拓，松川恵子， <u>田中洋一</u> ，内田雄 本人担当：データの前処理方法等
4. 初年次カリキュラムの検討-高校の授業科目との関連について-	共著	令和 3 年 3 月	2018 年度採択 文部科学省 私立大学研究 ブランディング事業 2020 年度成果報告書 pp. 83-89	新カリキュラムの初年次開講科目に関する教員対象アンケートを分析した結果を報告。 共著者：香月拓，松川恵子， <u>田中洋一</u> 本人担当：分析結果のまとめ方
6. 地方私立短期大学におけるオンライン授業の設計	共著	令和 3 年 3 月	情報処理学会研究報告 Vol. 2021-CLE-33, No. 12, pp. 1-4	COVID-19 の対策として、仁愛女子短期大学にて 2020 年度に取り組んできた学習支援システムの運用事例、遠隔授業研修会、アンケート調査等に関して報告する。 共著者： <u>田中洋一</u> ，野本尚美，島田貢

7. オンラインでのキャリア教育科目におけるSELの設計と進路選択自己効力の向上	単著	令和3年3月	JSiSE Research Report vol. 35, no. 6, pp. 27-30	明 本人担当：FD活動 2020年度1年前期に実施したキャリア教育科目におけるSELの設計及び進路選択自己効力の向上に関して報告する。
8. オンライン授業におけるキャリア教育の設計と実践	単著	令和2年10月	日本教育工学会研究報告集 20(3)pp. 185-188	Social and Emotional Learningに配慮して2020年度前期にオンラインで開講したキャリア教育科目の設計と実践について報告。特に、情動知能に関する尺度について考察。
9. 初年次教育を加えた情報リテラシー教育科目のリデザイン：共通ルーブリックの活用	共著	令和2年3月	仁愛女子短期大学研究紀要第52号, pp. 15-20	既存の情報リテラシー科目(教養科目)に初年次教育3回分を加えて、授業を再設計した。特に、レポート作成及びプレゼンテーションに関する評価ルーブリックを作成し、大学全体に導入する事例について報告する。 共著者：田中洋一, 帆谷和浩, 諏訪いづみ, 籠谷隆弘, 島田貢明 本人担当：授業デザイン, ルーブリックの作成
10. AIチャットボットを活用した振り返り支援の設計	共著	令和2年3月	JSiSE Research Report vol. 34, no. 6, pp. 193-197	経験学習の振り返り(リフレクション)において、AIチャットボットを活用した問い掛け(指示プロンプト)システムの設計について報告。 共著者：田中洋一, 宮崎誠, 森本康彦, 山川修 本人担当：リフレクション支援の設計
11. コアカリキュラムに則した科目「教育の方法と技術」の再設計	単著	令和元年10月	日本教育工学会研究報告集 19(4)pp. 113-116	平成31年からの新教職課程の再課程認定に合わせ、コアカリキュラムに則した教職科目「教育の方法と技術」の授業設計をリデザインした結果を報告。
12. デザイン思考を取り入れたプログラミング入門科目の設計	単著	令和元年6月	情報処理学会研究報告 Vol. 2019-CLE-28, No. 1, pp. 1-4	デザイン思考を取り入れたプログラミング入門科目の授業設計及び学習支援システムの活用方法について報告。
13. 大学連携で取り組む地域協働型PBLの設計と評価	共著	令和元年5月	JSiSE Research Report Vol. 34, no. 1, pp. 15-18	福井県COC+科目において地域協働型PBLを実施している。2018年度の授業設計とプロジェクト評価について報告。 共著者：田中洋一, 山川修 本人担当：プロジェクト評価
14. ラーニングポートフォリオを用いた学習評価	共著	平成30年12月	情報処理学会研究報告 Vol. 2018-CLE-26, No. 11, pp. 1-5	仁愛女子短期大学における学習成果の評価方法は、カリキュラムポリシーに明示している。その評価方法の1つとして、質的データの直接評価であるラーニングポートフォリオを用いている。本稿では、オープンソースポートフォリオMaharaを用いたラーニングポートフォリオの設計及び運用の実践を報告する。特に、ディプロマポリシーに明示した学習成果を、セメスターごとに根拠にもとづき自己評価させる仕組みを説明する。 共著者：田中洋一, 平塚紘一郎 本人担当：評価設計
15. カリキュラムマップに基づく学習成果の可視化方法の検討	共著	平成30年7月	JSiSE Research Report Vol. 33, no. 2, pp. 43-44	本研究では、カリキュラムマップに基づいた学習成果の可視化方法について検討を行う。特に、現在の可視

16. ラーニングポートフォリオを用いた質的な直接評価：カリキュラム・ポリシーに定める学習成果の一評価	共著	平成 30 年 7 月	JSiSE Research Report Vol. 33, no. 2, pp. 45-48	化, フィードバックの方法について述べる. 共著者：平塚紘一郎, 田中洋一 本人担当：評価設計 仁愛女子短期大学における学習成果の評価方法は, カリキュラムポリシーに明示している. その評価方法の1つとして, 質的データの直接評価であるラーニングポートフォリオを用いている. 本稿では, オープンソースeポートフォリオMaharaを用いたラーニングポートフォリオの設計及び運用の実践を報告する. 特に, ディプロマポリシーに明示した学習成果を, セメスターごとに根拠にもとづき自己評価させる仕組みを説明する. 共著者：田中洋一, 平塚紘一郎 本人担当：評価設計
17. 知識創造とeポートフォリオとの関係性：SECIモデルとeポートフォリオ・リテラシースキルを用いた授業設計	共著	平成 30 年 6 月	情報処理学会研究報告 Vol. 2018-CLE-25, No. 1, pp. 1-5	SECIモデル及びeポートフォリオ・リテラシースキルを用いた授業設計について報告する. 共著者：田中洋一, 山川修 本人担当：授業設計
18. シナリオを用いた Problem-Based Learning の設計	単著	平成 30 年 5 月	日本教育工学会研究報告集 18(2)pp. 69-72	本学生生活科学学科の共通科目(必修科目)「生活科学論」の授業内容及び教授方法を2017年度よりシナリオを用いた Problem-Based Learningへ変更した. シナリオは, 「衣と生活」「食と生活」「住と生活」「情報と生活」の4つである. この授業のインストラクショナル・デザイン, 学習支援システム(LMS及びeポートフォリオ)の活用法, 成績評価の方法等を報告する.
19. 保育現場における「教育の情報化」について	単著	平成 30 年 3 月	仁愛女子短期大学幼児教育学科『福井県内保育者対象アンケート調査研究報告書』	福井県内保育者対象アンケート調査のうち, 著作権, プレゼンテーション, タブレット, パソコンによる園だより作成, 保育教材, 情報を選び取る力という6項目を中心として分析及び考察. 編者：内田雄, 増田翼 本人担当：第11章(pp. 113-116)
20. 地域協働学習でリフレクションを促すURシートの開発	共著	平成 30 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 18(1)pp. 465-468	福井県の大学連携で実施している地域協働学習において, 経験学習の省察を高めるために開発したURシート(リフレクションシート)の効果について報告する. 共著者：田中洋一, 山川修, 谷内眞之助 本人担当：プロジェクトの評価
21. メンタリングを利用した科研を書くためのWSの設計と実施	共著	平成 29 年 12 月	教育システム情報学会 Research Report, vol. 32, no. 4, pp1-2	ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ(TPWS)を基にして, 科研の申請書を書くためのワークショップ(KKWS)を設計・実施した結果を報告. 共著者：山川修, 田中洋一, 杉原一臣 本人担当：分離できず
22. 幼稚園における教育の情報化に関する一考察：教育免許状更新講	単著	平成 29 年 7 月	日本教育工学会研究報告集 17(3)pp. 197-200	幼稚園での「教育の情報化」に関して, ①情報セキュリティ・ポリシーの設計及び②多様な園児に合わせた視

習の授業設計をとおして				聴覚教育の設計を到達目標とした教員免許状更新講習の授業設計を報告する。
23. 加速度計データに基づく協調関係の推測の実験的検討 (査読付)	共著	平成 29 年 4 月	教育システム情報学会誌, Vol. 34, No. 2, pp. 98-106	加速度センサのデータによって, 学習者の協調関係を推測する手法を開発した. 共著者: 多川孝央, 田中洋一, 山川修 本人担当: 地域協働学習の設計・運営 大学連携で実施する地域の問題解決型の授業を 3 年間試行した結果, 深く学習をするためには「問い」を立てることと, 「関係性」を構築することが重要だという結論に達した. 受講者が問い立てることと関係性をつくることを地域の問題解決型の授業の中でどのようにデザインしたかを報告する
24. ディープ・アクティブラーニングのための問いと関係性のデザインと実践 I	共著	平成 29 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 17(1)pp. 703-708	共著者: 山川修, 田中洋一, 谷内眞之助, 長水壽寛, 近藤晶 本人担当: プロジェクト評価 年間の試行の結果, 複数の大学の学生が参加する地域の問題解決型授業で, 深く学習をするために「問い」を立てることと, 「関係性」を構築することが重要だという結論に達した. 問いと関係性のデザインを取り入れた, 地域協働学習をどのように実践し評価したかを報告する.
25. ディープ・アクティブラーニングのための問いと関係性のデザインと実践 II	共著	平成 29 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 17(1)pp. 709-714	共著者: 田中洋一, 山川修, 谷内眞之助, 長水壽寛, 近藤晶 本人担当: 事後学習の設計, 学習評価 福井県大学間連携事業では, 各参加機関の学生の特徴を理解し, 教育改善に関わる IR データを提供することを目的に, 2010 年度から毎年学生意識調査を実施している. 本稿では, 2012 年度から 2015 年度にかけて実施した 4 年間の調査のうち, 学生の将来展望と自己成長感に関して年度間での比較を行った. 2012 年度から一部の機関において実施した記名式調査による経年変化の結果と併せて報告する.
26. 大学生の将来展望や自己成長感に対する 4 年間の意識の変化	共著	平成 28 年 5 月	日本教育工学会研究報告集 16(2) pp. 73-78	共著者: 徳野淳子, 田中洋一, 山川修 本人担当: 仁愛女子短大における調査
27. タブレット必携化による授業設計-エビデンスベースの学習成果アセスメントに向けて-	共著	平成 28 年 4 月	仁愛女子短期大学研究紀要第 48 号, pp. 13-19	仁愛女子短期大学生生活科学学科生活情報専攻で 2015 年度から開始した Windows タブレット無料貸与によって, エビデンスベースの学習成果アセスメントに向け, どのような授業設計をしているかを報告. また, 貸与タブレットに関するアンケート調査に関して分析. 共著者: 田中洋一, 前田博子, 平塚紘一郎
28. 加速度計データを用いた学習者間の協調関係の推測について	共著	平成 28 年 3 月	教育システム情報学会研究報告, vol. 30, no. 7, pp. 43-48	集団による学習が行われる環境において加速度センサを用いて学習者の行動や相互作用を分析する方法について検討する. 加速度センサにより得られる個人の身体の動きの情報より, 二者間での同調に基づいて協調

29. タブレット必携化による学習成果の可視化	共著	平成 28 年 3 月	日本教育工学会研究報告集 16(1)pp. 457-460	関係の有無とその大小を推測する手法を提案し、実際の学習環境のデータにより評価を試みる。 共著者：多川孝央，田中洋一，山川修 本人担当：地域協働学習の運営 仁愛女子短期大学生生活科学学科生活情報専攻において、2015 年度から開始した Windows タブレット無料貸与プロジェクト、特に電子教科書の活用及び e ポートフォリオとの連携による学習成果の可視化について報告する。 共著者：田中洋一，前田博子，澤崎敏文，平塚紘一郎 本人担当：タブレットプロジェクトの設計及び運営
30. 幼稚園教諭のための情報倫理とセキュリティ研修デザイン -PBL と e ポートフォリオを活用して-	単著	平成 27 年 7 月	日本教育工学会研究報告集 15(3) pp. 47-50	Problem Based Learning を活用して設計した幼稚園教諭免許状更新講習「情報倫理とセキュリティ研修」を幼児教育学科「教育の方法と技術」科目にも導入した。 本稿においては、PBL 及びオープンソース e ポートフォリオを用いた授業デザインを中心として報告する。
31. 大学連携で取組む地域の問題解決のための授業設計と評価：探求的学習とデザイン思考を組み合わせる	共著	平成 27 年 7 月	日本教育工学会研究報告集 15(3)pp. 187-191	福井県の高等教育機関が連携したプロジェクト (F レックス) では、昨年度 (2014 年度) から地域の問題解決の授業の試行を行っている。この授業を今年度 (2015 年度) から単位化し、後期に実施予定である。この授業では、授業設計として、エンゲストロームの探求的学習の枠組みと、デザイン思考のプロセスを融合させたものを採用している。本発表では、授業設計の概要とその評価方法を説明し、PBL (Project-Based Learning) やアクティブラーニングの有効な授業設計とその評価方法に関して議論したい。 共著者：山川修，田中洋一，谷内眞之助，長水壽寛 本人担当：半構造化インタビュー等のプロジェクトの評価
32. e ポートフォリオとタブレットを活用したアクティブラーニングの設計	単著	平成 27 年 5 月	情報処理学会研究報告 Vol. 2015-CLE-16, No. 6, pp. 1-3	ジェネリックスキルのリテラシーを身につける授業において、オープンソース e ポートフォリオ Mahara と Windows タブレットを活用したアクティブラーニングを、どのように設計しているかを報告する。
33. 集団学習のファシリテーションにおける菓子の効果と分析システムの検討	共著	平成 27 年 5 月	日本教育工学会研究報告集 15(2) pp. 11-14	ワークショップやサービスマーケティング、地域連携といった活動を取り入れた学習や、これらの活動のファシリテーションを通じての学習が広く取り組まれている。デザインの原則や経験則が共有されているが、このような活動を客観的に分析する手法や情報システムの開発が十分であるとは言えない。本稿では、菓子を用いたファシリテーションの手法とその効果に着目するとともに、情報機器やセンサを用いたシステムによる解

34. オープンソースの LMS と e ポートフォリオの連携	共著	平成 27 年 5 月	仁愛女子短期大学研究紀要第 47 号 pp. 1-5	<p>析に向けた課題を整理する。 共著者：江木啓訓，田中洋一，辻靖彦，豊田哲也，村上祐治 本人担当：ファシリテータへのインタビュー等</p> <p>仁愛女子短期大学における，授業支援としてのオープンソース LMS 「Moodle」と学習者支援としてのオープンソース e ポートフォリオ「Mahara」の連携について報告する。 共著者：田中洋一，平塚紘一郎 本人担当：連携システムのデザイン</p>
35. 大学連携による地域協働学習－探求的学習をデザイン原則として－	共著	平成 27 年 2 月	日本教育工学会研究報告集 15(1) pp. 39-42	<p>F レックス(福井県の高等教育機関連携)が 2014 年度に実施した地域協働学習プロジェクトの設計を報告する。本プロジェクトは，エンゲストロームの探求的学習をデザイン原則とした Project Based Learning である。学習共同体の形成に関しては，ウェアラブルセンサ及び Classroom Community Scale を用いて分析した。また，プロジェクト終了時に行った半構造化インタビューの結果について報告する。 共著者：田中洋一，多川孝央，山川修，谷内眞之助，長水壽寛 本人担当：プロジェクトの進行，半構造化インタビュー等のプロジェクトの評価</p>
36. 学習コミュニティ分析へのウェアラブルセンサの試用	共著	平成 27 年 2 月	日本教育工学会研究報告集 15(1) pp. 43-49	<p>ウェアラブルセンサのデータが学習コミュニティの分析にどのように応用できるか、またどのような分析手法が必要となるかについて、合宿形式でのグループ学習プロジェクトのデータの分析を通じて検討する。 共著者：多川孝央，山川修，田中洋一 本人担当：半構造化インタビュー等のプロジェクトの評価</p>
37. 大学連携における学生意識調査から得られた学生タイプに関する検討	共著	平成 26 年 5 月	情報処理学会研究報告 Vol. 2014-CLE-13 No. 3, pp. 1-8	<p>福井県大学連携事業では，2010 年度から学生意識調査を実施している。本調査では，学生の将来設計や授業外の過ごし方，大学生活で身についた知識や技能など多角的な視点で学生像を分析することで，学生理解や教育改善に関わる IR データを提供することを目的としている。本稿では，最新の分析結果として，2013 年度に行った F レックス学生意識調査アンケートの結果について報告する。 共著者：徳野淳子，田中洋一，入澤学，杉原一臣，籠谷隆弘，山川修 本人担当：仁愛女子短大における調査</p>
38. 学生意識調査フィードバックシステムの構築－F レックスにおける教学 IR－	共著	平成 26 年 3 月	仁愛女子短期大学研究紀要第 46 号 pp. 17-22	<p>F レックスで実施している学生意識調査の分析結果を学生にフィードバックするシステムの構築及び運用に関して報告する。 共著者：田中洋一，平塚紘一郎，入澤学，山川修 本人担当：フィードバック項目の設計，学修ポートフォリオとの連携</p>
39. 「学修ポートフォリ	共著	平成 26 年 3 月	仁愛女子短期大学	仁短の「学修ポートフォリオ」システ

オ」システムの構築 －eポートフォリオによる学修の促進－			研究紀要第46号 pp. 31-36	ムの構築及び運用に関して報告する。 共著者：平塚紘一郎，田中洋一，澤崎敏文 本人担当：学修ポートフォリオ及び活動の設計，アンケート調査
40. 2012年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ報告	共著	平成25年12月	大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要第47号，pp. 49 - 56	大阪府立大学工業高等専門学校にて2012年度に開催したティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップの概要について説明した後，ワークショップ参加者の感想を報告。 共著者：井上千鶴子，田中洋一（全16名中9番目） 本人担当：ワークショップの感想
41. 「学習成果の可視化」システムの構築 －到達度評価の活用－	共著	平成25年3月	仁愛女子短期大学研究紀要第45号 pp. 19-24	「学習成果の可視化」システムを構築するため，他大学の到達度評価方法を参考として設計した本学の方式を報告する。 共著者：田中洋一，平塚紘一郎，澤崎敏文 本人担当：全体構想，アンケート調査
42. 「学習成果の可視化」システムの構築 －eポートフォリオMaharaの活用－	共著	平成25年3月	仁愛女子短期大学研究紀要第45号 pp. 25-29	「学習成果の可視化」システムを構築するため，どのように学生へフィードバックしているか，運用事例を報告する。 共著者：平塚紘一郎，田中洋一，澤崎敏文 本人担当：システムの設計
43. 学生生活ポートフォリオを電子化する効果 －オープンソースMaharaを活用して－	共著	平成24年12月	日本教育工学会研究報告集12(5)，pp. 47-50	Semesterごとに，学生生活に関する自己目標と自己評価を書く紙媒体のポートフォリオ「充実した学生生活を送るために」を仁愛女子短期大学では10年以上継続している。本学生生活情報専攻では，今年度からオープンソースeポートフォリオMaharaを用いて，このポートフォリオの運用を始めた。eポートフォリオの運用方法を報告し，電子化による効果を考察。 共著者：田中洋一，平塚紘一郎 本人担当：学生生活ポートフォリオの設計，アンケート調査
44. Maharaによる学習成果の可視化システム	共著	平成24年12月	日本教育工学会研究報告集12(5)，pp. 67-70	eポートフォリオシステムMaharaと教務システムを連携した学習成果可視化システムの構築及び実践結果について報告。 共著者：平塚紘一郎，田中洋一，澤崎敏文 本人担当：学習成果可視化システムの設計
45. 幼児教育におけるメディア	単著	平成24年3月	仁愛女子短期大学研究紀要第44号 pp. 5-10	幼児教育におけるメディア利用に関する調査を報告する。
46. LMS・e-Portfolio・SNSを用いた学習コミュニティのデザイン	単著	平成23年12月	情報処理学会研究報告 Vol. 2011-CLE-6 No. 6，pp. 1-3	2009年度より仁愛女子短期大学にて，フレックス（福井県大学連携支援事業）の基盤システムであるLMS（Moodle），e-Portfolio（Mahara），SNS（OpenSNP）を用いた授業を行っている。2011年度の授業を中心として，学習コミュニティのデザイン，学生アンケート結果について報告。
47. 幼児教育におけるICT	単著	平成21年3月	仁愛女子短期大学	幼児教育におけるICT活用指導力に

活用力について			研究紀要第 41 号 pp. 73-79	関する調査を報告.
48. パソコン要約筆記実践による情報リテラシー教育の効果	単著	平成 20 年 3 月	仁愛女子短期大学 研究紀要第 40 号 pp. 59-64	パソコン要約筆記の実践による情報リテラシーの向上に関する調査を報告.
(その他) 【国際会議発表】 1. Analysis of Learning Activities in Learning Community Using Simple Accelerometer Sensor Data (査読付)	共著	平成 29 年 3 月	SITE2017 (The 28th International Conference: Society for Information Technology and Teacher Education)	We investigate how and what extent we can use the data acquired from accelerometer sensor to analyze and guess the states and activities of students in a group learning situation. Some research shows that the combination of infrared sensor and accelerometer sensor can effectively give information about the interaction between students, and other research shows that the combination of simple accelerometer also can be used to detect the collaboration in a group learning situation. We compare between these two combinations of sensors, and show how the analysis based on accelerometer sensor alone can be applied to the analysis of learning community. 共著者: 多川孝央, 田中洋一, 山川修 本人担当: 地域協働学習の運営
2. Detection of Collaboration Relation in Group Learning Situation Using Wireless Accelerometer Sensor (査読付)	共著	平成 28 年 3 月	SITE2016 (The 27th International Conference: Society for Information Technology and Teacher Education)	This research is intended to investigate how we can use some wireless sensor devices to know and analyze the states and activities of students in group learning situation, especially focusing on interaction or collaboration. Here we use the 3D accelerometers to detect and track the activities of students, and introduce some criteria to judge/evaluate whether students are working collaboratively or not, based on their similarity of movement at same time point. As the result, we can place the relationship between students as the network of collaboration represented as the weighted graphs, and we can analyze it by the techniques of social network analysis. 共著者: 多川孝央, 田中洋一, 山川修 本人担当: 地域協働学習の運営
3. An Experimental Use of Wearable Sensors for the Analysis of Learning Community (査読付)	共著	平成 27 年 3 月	SITE2015 (The 26th International Conference: Society for	The purpose of this research is to investigate how we can observe, measure and evaluate student's learning activities inside group learning situation

			Information Technology and Teacher Education)	by using wearable sensors. We point out and propose some techniques of for the analysis of learning community from multiple data. By combining the data from the sensors, we can know not only the activity of respective learners, but also the status of a group of learners. 共著者：多川孝央, 山川修, 田中洋一 本人担当：半構造化インタビュー等のプロジェクトの評価
4. Development of the Activity Design in the case of using e-Portfolio for SECI model (査読付)	共著	平成 26 年 7 月	2014 AAEEBL (The Association for Authentic, Experiential and Evidence-Based Learning) Annual Conference	We would like to explore two topics in our session. First, we introduce learning process and theory based on SECI, which is a knowledge-creating model within organizations by Ikujiro Nonaka. Second, we explain the activity design in the case of using e-Portfolio for a SECI model. We designed some courses based on foundational skills for using e-Portfolio in group activities. These are online and blended learning platforms in our virtual university environment. 共著者：田中洋一, 澤崎敏文 本人担当：e-Portfolio リテラシースキル
5. Designing Courses based on SECI model with Mahara, e-Portfolio (査読付)	共著	平成 25 年 10 月	E-Learn2013 (World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, and Higher Education)	ナレッジマネジメントにおける知識創造理論 SECI モデルを高等教育の学習理論として活用する方法及び e ポートフォリオ (Mahara) を用いた授業設計の報告。 共著者：澤崎敏文, 田中洋一 本人担当：SECI モデルにおける評価
6. Designing Courses based on SECI model with Mahara as an e-Portfolio (査読付)	共著	平成 25 年 7 月	the 12th ePortfolio and Identity Conference	F レックスの基盤システム (SNS, Moodle, Mahara) を用いた SECI モデルに基づいた授業設計の報告。特に、e ポートフォリオ (Mahara) の活用方法を紹介。 共著者：田中洋一, 澤崎敏文, 山川修 本人担当：情報活用力のための授業デザイン
7. DESIGNING COURSES BASED ON THE SECI MODEL WITH THE MAHARA E-PORTFOLIO (査読付)	共著	平成 25 年 2 月	Educause Learning Institution 2013	F レックスの活動や基盤システム (SNS, Moodle, Mahara) の紹介。SECI モデルに基づいた e ポートフォリオ (Mahara) を用いた授業設計の報告。 共著者：澤崎敏文, 山川修, 田中洋一 本人担当：Mahara の活用
8. Mahara' s Recent Situation in Japan, and Future (査読付)	共著	平成 24 年 7 月	Mahara UK 2012	日本における Mahara ユーザコミュニティ (MUC) 及び Mahara オープンフォーラム (MOF) の活動紹介。F レックスにおける Mahara, SNS, Moodle を連携させた基盤システムの

				設計思想の紹介. 授業における Mahara の活用事例の紹介. 共著者: 澤崎敏文, 田中洋一 本人担当: MUC 及び MOF の運営
【科学研究費採択】				
1. データ駆動型・ナレッジ駆動型アプローチを融合させたフィードバック誘起モデルの開発	研究分担者	2020-2023	基盤研究(B)	本研究では、自身の成長のために有用なフィードバックを誘起するために必要な要因を明らかにし、体系的にモデル化することを目的としている。研究方法は、データ駆動型アプローチとナレッジ駆動型アプローチを組み合わせる。研究範囲は、学習者とフィードバック提供者の1対1の場面、研究会のような学習者と複数のフィードバック提供者がいる1対多の場面とする。また、フィードバックをもらう場面だけでなく、その前後の要因も含め、動的・静的なフィードバック誘起要因を同定する。本研究では、フィードバックの提供だけでなく、学習者からの働きかけにより、より質の高いフィードバックを誘起する手法を提案する。 研究代表者: 合田美子(熊本大学) 研究分担者: 山田政寛, 石毛弓, 田中洋一, 山本佐江
2. 深いアクティブラーニングのための心理的安全性尺度の開発と評価	研究代表者	2019-2021	基盤研究(C)	人材開発や組織論の分野では成功するチームの構築に最も重要なものは、心理的安全性であると言われており。「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」と定義される深いアクティブラーニングを教育分野で設計するためにも心理的安全性が重要なことを明らかにしたい。心理的安全性がどの程度のレベルであるかを調べ、学習成果物の質との関連性を分析するため、本研究では日本の高等教育における心理的安全性の尺度を作成し、評価することをめざす。 研究代表者: 田中洋一 (仁愛女子短期大学) 研究分担者: 山川修
3. ビッグデータ時代における異なる学習履歴データを共通の視点で分析する方法論の構築	研究分担者	2016-2019	基盤研究(B)	学習を分析することによりトップダウン的に、自律的学習者の学習モデルを提案し、いくつかの指標でその妥当性を確認した。このモデルには、内省, 信頼, 意味の3つの要素が含まれているが、その3つの要素の基礎には、アタッチメント理論で示されている Secure Base があるのではないかという仮説を提示している。このモデルを利用することにより、データを分析する上での共通の視点を与えることになる。 また、上記のモデルを実証的に検証するため、ウェアラブル・センサーを使って効率よくデータ収集するシステムを構築した。

				研究代表者：山川修(福井県立大学) 研究分担者：田中洋一，井上仁，多川孝央，徳野淳子，安武公一，隅谷孝洋
4. 主体的な学習を習慣化するアクティブラーニング評価 e ポートフォリオシステムの開発	研究代表者	2016-2019	基盤研究(C)	基礎学力や学習意欲の低い学生が e ポートフォリオ学習を習慣化するため、経験学習に基づくリフレクション・プロンプトモデルを設計した。また、学生が e ポートフォリオに学習成果物を蓄積するサイクルを習慣化する仕組みとして、リフレクション・プロンプトモデルに従った対話が可能な振り返り支援 AI チャットボットを開発した。 研究代表者：田中洋一(仁愛女子短期大学) 研究分担者：森本康彦，宮崎誠，山川修
5. 生涯学習におけるスキルアップを支援する e ポートフォリオシステムの構築と実践	研究分担者	2014-2017	基盤研究(C)	生涯学習におけるスキルアップを支援する e ポートフォリオシステムの構築と実践を行った。海外の活用事例を参考にしつつ、日本の教育事情に応じた生涯学習支援 e ポートフォリオシステムの設計方針を明確にした。生涯学習で使用できる e ポートフォリオ構築のために、既存のサービスやツールを用いた e ポートフォリオ構築指標を作成した生涯学習におけるスキルアップ支援を実践するための e ポートフォリオのプロトタイプを 2 種類設計した。一つは既存のサービスを用いた e ポートフォリオである。もう一つは生涯学習におけるスキルアップに焦点化した e ポートフォリオとして、読書に焦点を当てた e ポートフォリオシステムを設計・開発した。 研究代表者：平岡斉士(熊本大学) 研究分担者：中島康二，田中洋一，松葉龍一，久保田真一郎，桑原千幸，鈴木克明
6. 真正な学習のために外部共同体を利用する学習環境のデザイン	研究代表者	2011-2013	基盤研究(C)	福井県内の高等教育機関連携プロジェクト「フレックス」で形成している学習共同体を利用し、真正な学習環境を構築する実践研究を行った。フレックスの基盤システムである、オープンソースの LMS (Moodle)，e ポートフォリオ (Mahara)，SNS (OpenSNP) を連携した授業や学生支援の設計を行い、学習効果を分析した。真正な評価方法である e ポートフォリオの実践事例を増加させるため、Mahara ユーザコミュニティや Mahara オープンフォーラムの運営に関わっている。 研究代表者：田中洋一(仁愛女子短期大学) 研究分担者：山川修，鈴木克明
【国内学会発表】 1. 保育者養成におけるオンライン授業「教育の方法と技術」の設計	単著	令和 3 年 3 月	JADA&UeLA 合同フォーラム 2020 予稿 pp. 24-27	オンライン授業「教育の方法と技術」でのグループワーク，グループ発表，模擬保育の設計・実践について

2. オンライン授業におけるプロセス・エデュケーションの設計：フィードバックの心理的安全性への影響	共著	令和3年3月	日本教育工学会 2021年春季全国大会講演論文集 pp. 317-318	て報告。 オンライン授業におけるプロセス・エデュケーションの設計及び学習支援システムの活用方法を報告。また、フィードバックによる心理的安全性への影響について、リフレクションシートを考察。 共著者：田中洋一，山川修，合田美子，山田政寛，石毛弓，山本佐江，可部繁三郎 本人担当：授業設計
3. デザイン思考を使ったPBLのオンライン化の試行	共著	令和3年3月	日本教育工学会 2021年春季全国大会講演論文集 pp. 67-68	デザイン思考を使った地域の問題解決型授業をオンライン化する際の工夫点及び課題について報告。 共著者：山川修，田中洋一 本人担当：評価
4. 学習者の視点でとらえたピア・フィードバックの特徴	共著	令和3年3月	日本教育工学会 2021年春季全国大会講演論文集 pp. 75-76	小学校教員志望学生の教育評価科目におけるパフォーマンス評価でのピア・フィードバックの特徴を報告。 共著者：山本佐江，合田美子，石毛弓，可部繁三郎，田中洋一，山田政寛 本人担当：評価手法のチェック
5. 2年制保育者養成校における3ポリシーの検討-アドミッション・ポリシーと高校の学びとの関連について-	共著	令和3年3月	日本保育者養成教育学会 第5回研究大会プログラム・抄録集 pp. 39	APと高校の学びとの関連について調査・分析し，その特徴や実態を報告。 共著者：香月拓，田中洋一，松川恵子 本人担当：分析手法のチェック
6. 2年制保育者養成校における3ポリシーの検討-本学における各授業の目標とディプロマポリシー（学習成果）との関連について-	共著	令和3年3月	日本保育者養成教育学会 第5回研究大会プログラム・抄録集 pp. 38	本学2019年度入学生の各授業における「到達目標」をDP（学習成果）との関連で考察。 共著者：松川恵子，田中洋一，香月拓 本人担当：分析手法のチェック
7. 遠隔授業におけるSELのためのリフレクション及びフィードバックの設計	単著	令和2年9月	日本教育工学会 2020年秋季全国大会講演論文集 pp. 129-130	遠隔授業におけるSocial and Emotional Learningを構築するためのリフレクション（経験学習サイクル）及びフィードバックの設計及び実践について報告。
8. 遠隔授業におけるSELの設計	単著	令和2年9月	第45回教育システム情報学会全国大会講演論文集 pp. 71-72	非同期型や同期型の遠隔授業において，どのようにSELを設計・実践しているかを報告。
9. 幼児教育におけるプログラミング教育の可能性	共著	令和2年5月	日本保育学会 第73回大会	先行研究，教員免許状更新講習，幼児教育学科の授業を通して，幼児教育におけるプログラミング教育の可能性を考察。 共著者：田中洋一，香月拓，松川恵子 本人担当：授業設計
10. 保育士養成課程学生における保育専門職と養成に対する意識調査	共著	令和2年5月	日本保育学会 第73回大会	保育士及び看護師の職業イメージを短大生に対して調査・分析した結果を報告。 共著者：乙部貴幸，賞雅さや子，木下由香，田中洋一 本人担当：生活情報専攻学生の調査
11. 情動知能を高める地域協働型PBLの設計	共著	令和2年3月	第26回大学教育研究フォーラム発表論文集 pp. 196	福井県COC+科目において地域協働型PBLを実施している。自律的学習者育成モデルを用いて，本授業前後における情動知能の向上を分析した結果について報告。 共著者：山川修，田中洋一 本人担当：プログラムの評価
12. 2年制保育者養成校における3ポリシーの検討 -テキストマイニングを用いたディプロマ・ポリシーの分析	共著	令和2年3月	日本保育者養成教育学会第4回研究大会プログラム・抄録集 pp. 80	2年制保育者養成校のディプロマ・ポリシーを調査・分析した結果を報告。 共著者：松川恵子，田中洋一，香月拓 本人担当：分析手法

13. 2年制保育者養成校における3ポリシーの検討ーテキストマイニングを用いたアドミッション・ポリシーの分析ー	共著	令和2年3月	日本保育者養成教育学会第4回研究大会プログラム・抄録集 pp. 81	2年制保育者養成校のアドミッション・ポリシーを調査・分析した結果を報告。 共著者：香月拓，田中洋一，松川恵子 本人担当：分析手法
14. 簡易版ティーチングポートフォリオ作成ワークショップの設計	共著	令和2年2月	日本教育工学会2020年春季全国大会プログラム集 pp. 21-22	学内FD研修会(90分)2回分と事前事後学習を組み合わせた簡易版ティーチングポートフォリオ作成ワークショップの設計について報告。 共著者：田中洋一，山川修 本人担当：ワークショップ設計・実施
15. 質問ワークは心理的安全性を向上させるのか	共著	令和元年9月	第44回教育システム情報学会全国大会講演論文集，pp. 83-84	福井県COC+科目において地域協働型PBLを実施している。2018年度の授業設計と評価にもとづき，質問ワークの活用と心理的安全性との関係について報告する。 共著者：田中洋一，山川修 本人担当：プログラムの評価
16. 内発的動機づけを高める地域協働型PBLの設計	共著	令和元年9月	日本教育工学会2019年度秋季全国大会講演論文集 pp. 447-448	福井県COC+科目において地域協働型PBLを実施している。2018年度の授業設計及び内発的動機づけの向上について報告。 共著者：田中洋一，山川修 本人担当：プログラムの評価
17. Project Based Learningにおいて心理的に安全な場を作る授業設計	共著	平成30年9月	日本教育工学会第34回全国大会講演論文集 pp. 103-104	福井県の高等教育機関が連携して実施する，地域の問題を解決するProject Based Learning型授業では，エンゲストロームの探求的学習サイクルを用いている。エンゲストロームの探求的学習では，動機づけとしてコンフリクト(矛盾，葛藤，対立)が重要である。ただし，コンフリクトから問いを立てるためには，心理的安全性が保たれた学習コミュニティ(場)が必要である。本稿では，ROVAIのClassroom Community Scaleを用いて，心理的安全性を考察する。 共著者：田中洋一，山川修 本人担当：プログラムの評価
18. 質問ワークを用いて対話を創発する場の設計ー大学連携で取り組む地域協働学習をケースとしてー	共著	平成30年9月	第43回教育システム情報学会全国大会講演論文集，pp. 227-228	福井県の高等教育機関連携で地域協働学習(Project-Based Learning)を設計・実施・評価しているFレックスPBLワーキンググループでは，主体的・対話的で深い学びを実現するためには，「問いを立てる」ことと「関係性を創る」ことが重要だと考えている。この2つに大きな影響を持つのが対話(dialogue)である。2016年度及び2017年度の地域協働学習を観察していると，質問ワークを活用することにより，対話を創発する場が形成されている。本授業で用いている学習理論や授業設計等を報告する。 共著者：田中洋一，山川修 本人担当：プログラムの評価
19. 主体的・対話的で深い学びのための問いと関係性の設計	共著	平成30年3月	第24回大学教育研究フォーラム発表論文集 pp. 209	福井県の大学連携での地域協働学習において，デザイン思考とリーダーシップ最小3要素を取り入れることで，「問いを立てる」ことと「関係性を創る」ことを設計した結果を報告。 共著者：田中洋一，山川修 本人担当：プログラムの評価
20. 主体的・対話的で深い学びのために心理的に安全な場を作る授業設	共著	平成29年9月	日本教育工学会第33回全国大会講演論文集 pp. 479-480	福井県の大学連携での地域協働学習では，主体的・対話的で深い学びを設計するため，エンゲストロームの探

計					求的学習サイクルを用いている。本サイクルでは、動機づけとしてコンフリクト(矛盾, 葛藤, 対立)が重要であり、コンフリクトから問いを立てるためには、心理的安全性が重要であることを報告。 共著者: <u>田中洋一</u> , 山川修, 合田美子 本人担当: 授業の評価方法や尺度
21. e ポートフォリオを用いた学習成果の可視化	単著	平成 29 年 8 月	第 42 回教育システム情報学会全国大会講演論文集, pp. 471-472	e ポートフォリオを用いて、セメスターにおける学習成果の到達度を自己評価させた実践を報告する	
22. 学習において「問い」と「関係性」が果たす役割	共著	平成 29 年 8 月	第 42 回教育システム情報学会全国大会講演論文集, pp. 307-308	「問い」と「関係性」が、学習にどのように関わっているかをモデル化したものを提案する。 共著者: 山川修, <u>田中洋一</u> , 谷内眞之助 本人担当: 分離できず	
23. 幼稚園児に対する紙教材とマルチメディア教材との比較	単著	平成 29 年 7 月	日本教育メディア学会 2017 年度第 1 回研究会	幼稚園 5 歳児に対して、小学校 1 年生の 1 日を練習するクイズ形式の教材を紙メディアとマルチメディアで制作。紙教材(ペーパーサート)とマルチメディア教材(PowerPoint)を比較し、どちらが園児にわかりやすいかを分析した。	
24. 大学連携で取組む地域協働学習の設計と評価 -デザイン思考を用いた探究的学習の実践-	共著	平成 28 年 9 月	日本教育工学会第 32 回全国大会講演論文集 pp. 729-730	福井県の高等教育機関が連携して実施している地域の問題を解決する授業では、授業設計として、エンゲストロームの探求的学習の枠組みと、デザイン思考のプロセスを融合させたものを採用している。本発表では、授業設計の概要とその評価方法を説明し、PBL (Project-Based Learning) やアクティブラーニングの有効な授業設計とその評価方法に関して報告する。 共著者: <u>田中洋一</u> , 山川修, 谷内眞之助, 長水壽寛, 多川孝央 本人担当: プロジェクトの評価	
25. 大学の授業における e ポートフォリオを活用した学習評価	単著	平成 28 年 9 月	日本テスト学会 第 14 回大会	短期大学にて開講しているプログラミング科目, キャリア科目, ジェネリックスキルを身につける科目等において、どのように e ポートフォリオを活用してパフォーマンス評価をしているかを紹介する。特に、ある科目の期末課題として 1 年前期におけるショーケース・ポートフォリオを作成させ、学習成果を自己評価させている事例にもとづき、e ポートフォリオを活用した学習評価について考える。	
26. e ポートフォリオを用いた学習成果の可視化 -仁短 生活情報専攻の戦略-	単著	平成 28 年 9 月	Mahara オープンフォーラム 2016 講演論文集	仁愛女子短期大学生生活科学学科生活情報専攻の戦略である e ポートフォリオを用いた学習成果の可視化について、実例を示して報告する。	
27. e ポートフォリオ学習を習慣化するプロンプトの設計	共著	平成 28 年 8 月	第 41 回教育システム情報学会全国大会講演論文集, pp. 183-184	基礎学力, 学習意欲, 将来への意欲が低い最近の大学生に対して、主体的で深い学びを創発させるため、学習を習慣化させる仕組みを提案する。 共著者: <u>田中洋一</u> , 森本康彦, 宮崎誠, 山川修 本人担当: プロジェクトの統括	
28. 福井県大学間連携事	共著	平成 28 年 7 月	第 5 回大学情報・機関	福井県大学間連携にて、どのように	

			調査研究会	学生意識調査を実施してきたか、またその課題について報告。 共著者：徳野淳子，田中洋一，杉原一臣，山川修 本人担当：仁愛女子短期大学での記名式調査等
業 (F レックス) で進める学生意識調査の 5 年間の歩み				
29. SECI モデルと e ポートフォリオ・リテラシースキルを用いた授業設計	共著	平成 27 年 10 月	Mahara オープンフォーラム 2015 講演論文集 pp. 3-7	SECI モデル及び e ポートフォリオ・リテラシースキルを用いた授業設計について報告する。 共著者：田中洋一，山川修 本人担当：授業設計及び授業実践
30. デザイン思考を取り入れたプログラミング入門	共著	平成 27 年 9 月	日本教育工学会第 31 回全国大会講演論文集 pp. 363-364	女子短大生が論理的な思考を身につけるための入門的なプログラミングに関する授業科目において、デザイン思考を取り入れた。本科目の授業設計について報告する。 共著者：田中洋一，山川修 本人担当：授業設計及び授業実践
31. 福井県大学間連携で行う TP 作成ワークショップ	共著	平成 27 年 9 月	日本教育工学会第 31 回全国大会講演論文集 pp. 337-338	福井県の高等教育機関が連携する事業 (F レックス) では、相互研修型 FD が行われていて、その 1 つにティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップの実施がある。本稿では、取り組みの主体となっている F レックスを紹介するとともに、これまでのワークショップを振り返りつつ、今後の展望について述べる。 共著者：杉原一臣，江本晃美，田中洋一，山川修 本人担当：学習チームリーダとしてのワークショップ運営
32. 大学生の自己成長感に関する要因の分析 -F レックス学生意識調査(教学 IR) から-	共著	平成 27 年 9 月	日本教育工学会第 31 回全国大会講演論文集 pp. 339-340	大学生の高い自己成長感につながる要因を探るため、福井県大学間連携事業で実施した学生意識調査を用いて、将来設計、学習意欲、参加型授業の経験、大学生生活の過ごし方が、大学生の自己成長感にどのように関係するか分析した。結果、明確な将来設計のある学生は、「自主学習」、「友人とのつきあい」に活発で、授業内外の活動を通して高い自己成長感を示すことが確認された。 共著者：徳野淳子，田中洋一，山川修 本人担当：仁愛女子短期大学での記名式調査等
33. 主体的な学習を習慣化するアクティブラーニング可視化システムの開発 -e ポートフォリオ及び電子教科書の Learning Analytics 方法に関する一考察-	共著	平成 27 年 9 月	第 40 回教育システム情報学会全国大会講演論文集 pp. 279-280	大学における主体的な学習を習慣化するため、以下のような方法により学習を可視化するシステムを開発する。1 つめは、学生が自ら e ポートフォリオに毎日の学びを記述する方法。2 つめは、e ポートフォリオに記録された学習成果物に対する Learning Analytics 方法。3 つめは、電子教科書の閲覧ログに対する Learning Analytics 方法。本発表では、特に、2 つめと 3 つめに関して報告する。 共著者：田中洋一，森本康彦，宮崎誠，山川修 本人担当：システムの設計

34. 大学生活の過ごし方から見た学生タイプ の分析－複数の高等教育機関による比較と検討－	共著	平成 27 年 9 月	第 40 回教育システム情報学会全国大会講演論文集 pp. 283-284	福井県大学間連携事業：F レックスでは、各参加機関の学生の特徴を理解し、教育改善に役立てるため、2010 年度から毎年学生意識調査を実施している。本研究では 2014 年に実施した調査のうち、学生の一週間の過ごし方に焦点を当て、その回答から学生をタイプ別に分類した。機関や学問分野、さらには学部学科専攻毎に比較したところ、それぞれで各学生タイプの割合が大きく異なることが確認された。 共著者：徳野淳子，田中洋一，杉原一臣，籠谷隆弘，山川修 本人担当：仁愛女子短大における調査
35. タブレットと e ポートフォリオを用いた学習成果の可視化	単著	平成 27 年 8 月	SPOD フォーラム 2015 ポスターセッション	仁愛女子短期大学生活情報専攻における、タブレットと e ポートフォリオを用いた、「質的データの直接評価」であるパフォーマンス評価の可視化を報告する。その他、「量的データの直接評価」であるジェネリックスキルテスト、「量的データの間接評価」である学生意識調査も説明する。
36. 福井県大学間連携で行う TP 作成ワークショップ	共著	平成 27 年 8 月	SPOD フォーラム 2015 ポスターセッション	福井県の大学間連携 (F レックス) で実施しているティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップについて報告。 共著者：杉原一臣，江本晃美，田中洋二，山川修 本人担当：学習チームリーダーとしてのワークショップ運営
37. 学生意識調査のフィードバック－大学連携による教学 IR－	共著	平成 27 年 6 月	大学教育学会第 37 回大会発表要旨集録 pp. 180-181	福井県大学間連携事業 (F レックス) で行っている教学 IR、特に仁愛女子短期大学における学生へのフィードバック及び教員へのフィードバックについて報告する。 共著者：田中洋一，徳野淳子，山川修，平塚紘一郎 本人担当：フィードバックのデザイン
38. 保育者のための情報倫理とセキュリティ研修の ID	単著	平成 27 年 5 月	日本保育学会第 68 回大会発表要旨集 SBM000136-1	広島大学型 PBL を取り入れた、教員免許状更新講習のインストラクショナルデザインについて報告する。
39. 福井県大学間連携事業 (F レックス) における教学 IR の取り組み－継続的な学生意識調査の実施と分析－	共著	平成 27 年 3 月	第 21 回大学教育研究フォーラム発表論文集	福井県大学間連携事業 (F レックス) では、大学生の学びや成長に対する意識の変化を捉えるため、2010 年度より毎年 1 回継続して学生意識調査を実施している。本発表では、調査体制が整い始めた 2012 年度以降の結果を中心に、年度間の比較や一部機関において記名式で実施したデータを用いた経年変化を報告する。 共著者：徳野淳子，田中洋一，山川修 本人担当：仁愛女子短大における調査
40. Moodle と Mahara を連携した授業設計と学生支援	共著	平成 27 年 2 月	Moodle Moot Japan 2015	Moodle との連携が取りやすい、オープンソースの e ポートフォリオである Mahara を活用した授業設計や学生支援について報告する。授業やクラス活動のポータルサイトである Moodle では動的なシラバス、確認テ

41. e ポートフォリオ・リテラシースキルとデジタルストーリーテリング	単著	平成 26 年 10 月	第 21 回日本教育メディア学会年次大会講演論文集	スト, 課題提出, アンケート等として利用し, 学生が学習成果物を蓄積, 共有, 評価, 振り返る場として Mahara を用いた, いろいろな事例を紹介する. 特に, Moodle ネットワークを用いた標準的な連携におけるメリットとデメリットを説明する. 共著者: 田中洋一, 平塚紘一郎 本人担当: 授業及び学生支援の設計・運用
42. e ポートフォリオに PDF を埋め込む効果	共著	平成 26 年 9 月	Mahara オープンフォーラム 2014 講演論文集 pp. 11-14	本研究では, 真正な学習として e ポートフォリオを用いた授業設計について報告する. 特に, 授業設計において参考にすべき e ポートフォリオ・リテラシースキル及びポートフォリオとしてのデジタルストーリーテリングの重要性を紹介する. Mahara1.8 以降, e ポートフォリオ・ページに PDF を埋め込むことが可能となった. 学生意識調査の分析結果を学生へフィードバックし自己分析に活用したり, 授業中にブレインストーミングと KJ 法によりマップ化したものや園だより等の学習成果物を相互閲覧したりすることの学習効果について報告する. 共著者: 田中洋一, 平塚紘一郎, 徳野淳子, 山川修 本人担当: PDF 埋め込みを活用した授業及び学生支援の設計
43. AAEEBL2014 年次大会での Mahara セッションの紹介	共著	平成 26 年 9 月	Mahara オープンフォーラム 2014 講演論文集 pp. 3-4	7 月末に行われた AAEEBL2014 年次大会に参加し, 一般発表にあった Mahara セッションでいくつかの大学の取り組みについて紹介されていた. セッションの内容で気になった点を中心に紹介する. 共著者: 久保田真一郎, 宮崎誠, 田中洋一, 平岡齊士, 松葉龍一 本人担当: Kristina さんとの打合せ
44. e ポートフォリオを用いた真正な学習の授業設計一文系学生のためのプログラミング入門ー	共著	平成 26 年 9 月	日本教育工学会第 30 回全国大会講演論文集 pp. 303-304	女子短大生が論理的な思考を身につけるための入門的なプログラミングに関する授業方法を真正な学習に設計した. 「CoderDojo 福井」のボランティアスタッフとして小中学生に教える立場で, プログラムの改良や説明書作成を行う. 制作物はオープンソース e ポートフォリオに記述し, 学習コミュニティでピアアセスメント及びセルフアセスメントを実施する. 共著者: 田中洋一, 澤崎敏文 本人担当: 真正な学習の設計
45. 大学連携で実施する学生意識調査からみる学びや成長に対する 2 年間の意識の変化	共著	平成 26 年 9 月	日本教育工学会第 30 回全国大会講演論文集 pp. 409-410	福井県大学間連携事業 (フレックス) では, 大学生の学びや成長に対する意識の変化を捉えるため, 2012 年度から一部の機関において記名式で学生意識調査を実施している. 本稿では将来設計や大学生活で身に付いた知識・技能等の項目において分析した 2 年間の経年変化を報告する. 共著者: 徳野淳子, 田中洋一, 山川修 本人担当: 仁愛女子短大の調査

46. PBL 型授業設計と企業参加型の授業設計	共著	平成 26 年 9 月	日本教育工学会第 30 回全国大会講演論文集 pp. 757-758	主体的で深い学びを創発させるためには、職場や市民生活における「リアルな課題」(真正な文脈, 真正な活動)に取り組み、プロセスの中で評価すること(真正の評価)が重要である。そこで、学生がリアリティを持って学習できるような PBL 型授業を構築するにあたり、企業の現実の問題を授業課題として活用した実践例とその課題を報告する。 共著者：澤崎敏文，田中洋一
47. ジェネリックスキルを身につける授業設計－e ポートフォリオ Mahara の活用－	単著	平成 26 年 9 月	第 39 回教育システム情報学会全国大会講演論文集 pp. 227-228	本人担当：学習理論及び真正の評価 ジェネリックスキルを身につける、初年次教育及びキャリア教育科目の授業設計について報告する。教育方法としては、真正な学習をめざし、e ポートフォリオ(オープンソース Mahara)や協同学習(グループワーク)を活用している。学習効果としては、特性的自己効力感尺度、進路選択に対する自己効力尺度、ジェネリックスキル標準テスト(PROG)、e ポートフォリオ等を使用して分析した。
48. 大学連携による教学 IR のすゝめ－F レックスにおける学生意識調査の分析－	共著	平成 26 年 3 月	第 20 回大学教育研究フォーラム発表論文集	福井県の高等教育連携プロジェクトである F レックスの IR ワーキンググループが実施している学生意識調査(2012 年度及び 2013 年度)の分析に関して報告する。 共著者：田中洋一，入澤学，山川修 本人担当：仁愛女子短大における調査
49. 幼稚園・保育所における視聴覚教育の設計	単著	平成 25 年 10 月	日本教育メディア学会第 20 回年次大会講演論文集	幼稚園及び保育所における放送教育を含む視聴覚教育に着目し、幼児及び保育者に対して効果的な視聴覚教材・視聴覚機器の活用事例を報告。
50. 大学連携ですすめる学生意識調査の分析－F レックスにおける教学 IR の取り組み－(査読付)	共著	平成 25 年 9 月	日本教育工学会第 29 回全国大会講演論文集 pp. 151-154	福井県の高等教育連携プロジェクトである F レックスの IR ワーキンググループが実施している学生意識調査の分析に関して報告する。 共著者：田中洋一，入澤学，山川修 本人担当：仁愛女子短大における調査
51. 「学習成果の可視化」システムの構築と運用－e ポートフォリオ Mahara の活用－	共著	平成 25 年 9 月	日本教育工学会第 29 回全国大会講演論文集 pp. 829-830	オープンソースの e ポートフォリオシステム Mahara と教務システムを連携した「学習成果可視化システム」の構築について報告。 共著者：平塚紘一郎，田中洋一，澤崎敏文 本人担当：システムの設計
52. MaharaUK2013 から読み解く Mahara (企画セッション)	共著	平成 25 年 9 月	Mahara オープンフォーラム 2013	MaharaUK2013 の参加報告、イギリスやニュージーランドの Mahara コミュニティ(特にデベロッパ)の活動紹介、次期バージョン Mahara1.8 の機能紹介等。 共著者：田中洋一，宮崎誠 本人担当：Mahara コミュニティの紹介
53. ePortfolio & Identity Conference, AAEEBL Annual ePortfolio Conference 参加レポート	共著	平成 25 年 9 月	Mahara オープンフォーラム 2013	ePortfolio & Identity Conference 2013 及び AAEEBL Annual ePortfolio Conference2013 の参加報告。両カンファレンスの発表タイトル及びアブストラクトから単語の bi-gram を用

ト (企画セッション)				いた共起ネットワーク図を作成し、共通点及び相違点を比較。 共著者：久保田真一郎，田中洋一，宮崎誠，平岡斉士，松葉龍一 本人担当：ePIC2013の一部
54. 真正な学習を目指したプログラミング入門－eポートフォリオを用いた協調学習－	単著	平成 25 年 9 月	第 38 回教育システム情報学会全国大会講演論文集 pp. 235-236	女子短大生が論理的な思考を身につけるための入門的なプログラミングに関する授業方法を真正な学習に設計し直した。「CoderDojo 福井」のボランティアスタッフとして小中学生に教える立場で、プログラムの改良や説明書作成を行う。制作物はオープンソース e ポートフォリオに記述し、学習コミュニティでピアアセスメント及びセルフアセスメントを実施する。サービスラーニングへの展開を含め、報告する。
55. Designing Courses based on SECI model with Mahara as an e-Portfolio	共著	平成 25 年 3 月	第 2 回熊本大学 e ポートフォリオ国際セミナー	F レックスの活動や基盤システム (SNS, Moodle, Mahara) の紹介. SECI モデルに基づいた e ポートフォリオ (Mahara) を用いた授業設計の報告。 共著者：田中洋一，澤崎敏文，山川修 本人担当：保育者養成における授業設計
56. Mahara と Moodle の連携を学ぶ場「MOF」	単著	平成 25 年 3 月	MoodleMoot Japan 2013 発表論文集	e ポートフォリオ Mahara のユーザコミュニティ (MUC) 及び Mahara オープンフォーラム (MOF) の紹介。Moodle との連携事例の報告。
57. SECI モデルにおける e ポートフォリオの効果 (査読付)	共著	平成 24 年 9 月	日本教育工学会第 28 回全国大会講演論文集 pp. 147-148	福井県内の高等教育機関が連携して仮想的総合大学環境を構築するプロジェクト「F レックス」では、基盤システムである e ポートフォリオ・LMS・SNS を活用した学習環境デザインを行っている。授業という学習共同体における知識創造を SECI モデルで分析し、e ポートフォリオの効果について報告。 共著者：田中洋一，澤崎敏文，山川修 本人担当：保育者養成における授業設計
58. Mahara を利用した学習成果の可視化システムの構築	共著	平成 24 年 9 月	日本教育工学会第 28 回全国大会講演論文集 pp. 677-678	e ポートフォリオ Mahara と教務システムを連携した学習成果可視化システムの設計について報告。 共著者：平塚紘一郎，田中洋一，澤崎敏文 本人担当：学習成果可視化システムの設計
59. Mahara を用いた SECI モデルにもとづく学習環境デザイン	共著	平成 24 年 9 月	Mahara オープンフォーラム 2012 講演論文集 pp. 28-31	福井県大学連携プロジェクト (F レックス) では、基盤システム (e ポートフォリオ「Mahara」, LMS「Moodle」, SNS「OpenSNP」) を用いて、SECI モデルにもとづく知識創造を行う学習共同体を構築している。仁愛女子短期大学及び福井県立大学における Mahara を用いた授業設計や学習支援について報告。 共著者：田中洋一，澤崎敏文，山川修 本人担当：保育者養成における授業設計，学生支援の設計
60. 真正な学習のための学習共同体のデザイン	単著	平成 24 年 8 月	教育システム情報学会第 37 回全国大会講演論文集 pp. 360-361	真正な学習を行う学習共同体を構築するため、オープンソースの LMS (Moodle) と e ポートフォリオ

61. Moodle と Mahara を連携した授業設計	単著	平成 23 年 10 月	Mahara オープンフォーラム 2011 講演論文集 pp. 25-27	(Mahara) を連携させ、いかに学習環境をデザインしたかを説明. また, 学習共同体に参加することにより, 学習成果及び自己効力感がどのように変化したかを報告. 2009 年度より仁愛女子短期大学にて, F レックス (福井県大学連携支援事業) の基盤システムである LMS (Moodle) と e ポートフォリオ (Mahara) を用いた授業を行っている. 2011 年度前期の 2 つの授業における利用方法及び学生によるアンケート結果について報告.
62. 大学間連携における e ポートフォリオ、LMS、SNS を連携した教育実践 (査読付)	共著	平成 23 年 9 月	日本教育工学会第 27 回全国大会講演論文集 pp. 119-122	大学連携 F レックスにおける e ポートフォリオ, LMS, SNS を連携した教育実践の報告. 共著者: 澤崎敏文, 山川修, 田中洋一 本人担当: 情報活用力を身につける授業実践
63. Mahara を用いた教育の実践 —Moodle との連携等—	共著	平成 23 年 2 月	MoodleMoot Japan 2011 高知	オープンソースの LMS 「Moodle」と連携しやすい e ポートフォリオ 「Mahara」の教育実践例を報告. ラウンドテーブルを企画し, F レックス・熊本大学・酪農学園大学の事例をもとにして, Moodle と Mahara の連携方法, e ポートフォリオ (特に Mahara) の高等教育での可能性, Mahara ユーザコミュニティについて議論. 共著者: 田中洋一, 遠藤大二, 久保田真一郎 本人担当: F レックスでの Mahara 活用
64. オープンソース e ポートフォリオを用いた教育実践のすゝめ	共著	平成 22 年 12 月	平成 22 年度情報教育研究会集講演論文集 pp. 362-364	オープンソース e ポートフォリオ Mahara を用いた教育実践に関して報告. 共著者: 田中洋一, 山川修, 澤崎敏文 本人担当: Web 制作科目での Mahara 活用
65. 大学連携における学習コミュニティのデザインと実践 (査読付)	共著	平成 22 年 9 月	日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集 pp. 67-70	福井県の大学連携における学習コミュニティのデザイン原則や実践を報告. 共同著者: 山川修, 田中洋一 (全 10 名中 9 番目) 本人担当: F レックス学習チームでの実践
66. 大学間連携におけるオープンソース e ポートフォリオを用いた教育の実践 (査読付)	共著	平成 22 年 9 月	日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集 pp. 137-140	大学間連携でオープンソース e ポートフォリオを運営, 教育実践を行う事例及びメリットを報告. 共著者: 田中洋一, 山川修, 澤崎敏文 本人担当: Web 制作科目での Mahara 活用
67. 学習コミュニティ構築を意図した連携基盤システム	単著	平成 22 年 8 月	教育システム情報学会第 35 回全国大会講演論文集 pp. 341-342	学習コミュニティを構築するため設計した連携基盤システムの報告.
68. F レックスを発表の場として用いたインフォーマルラーニングの実践	共著	平成 22 年 8 月	教育システム情報学会第 35 回全国大会講演論文集 pp. 303-304	F レックスを用いて学習環境を設計したインフォーマルラーニングの実践を報告. 共同著者: 山川修, 笹谷隆弘, 徳野淳子, 田中洋一, 澤崎敏文 本人担当: Mahara の運用設計
69. SNS と e ポートフォリ	単著	平成 21 年 8 月	教育システム情報学	F レックスの SNS と e ポートフォリ

<p>オを用いたインフォーマル・ラーニングの実践 - 福井県大学間連携取組 (F レックス) を基盤として -</p> <p>70. 保育者養成におけるマルチメディア教育の実践 - 静止画による CM 制作を通して -</p> <p>71. 幼児教育学科におけるマルチメディア教育</p>	<p>単著</p> <p>単著</p>	<p>平成 20 年 9 月</p> <p>平成 20 年 5 月</p>	<p>会第 34 回全国大会 講演論文集 pp. 326-327</p> <p>教育システム情報学会第 33 回全国大会 講演論文集 pp. 326-327</p> <p>日本保育学会第 61 回大会発表論文集 242-243</p>	<p>オを用いたインフォーマルラーニングの実践例を報告.</p> <p>保育者養成機関におけるマルチメディア教育 (静止画による CM 制作) の実践を報告.</p> <p>幼児教育学科におけるマルチメディア教育に関して報告.</p>
--	---------------------	---------------------------------------	---	---